

シャーンディリヤのアートマン観

——チャーンドーギヤ・ウパニシャッド Ⅲ・14——

湯田 豊

インド思想史の立場から見れば、チャーンドーギヤ・ウパニシャッドにおいて説かれるシャーンディリヤ (Śaṇḍilya) の教えは極めて重要な意義を有する。何故なら、彼のこの僅か四節から成る短い文章はウッダーラカの *Uttaraśāhi* の思想と並んで梵我一如の理論的基礎をなすと考えられているからである。私はシャーンディリヤの梵我一如が実際にどういう内容のものであつたかを言語の事実 に即して極めて簡単に検討してみたい。学界の通説に従えば、シャーンディリヤ説は *coincidentia oppositorum* (反対の合致) として捉えられている。通説によれば、アートマンは米粒よりも、あるいは大麦の穀粒よりも、あるいは芥子粒よりも、あるいはきび粒よりも、あるいはきび粒の核よりも一層微細であるが、他方、それは大地よりも大、空よりも大、天よりも大で、これらの世界よりも大である。そしてこの極小にして極大のアートマンがブラフマンに他ならないというのである。私は三つ

の観点からこの通説を批判したい。

まず第一にアートマンやブラフマンがそれぞれ極小・極大であるという思想が果してシャーンディリヤの考えに合致するか否かを吟味しよう。シャーンディリヤが極小・微細の意味に使用している言語は *anyas* (*anu* の比較級) であるが、古ウパニシャッド全体を通じてこれがブルシャを意味することは確実である。シャタパタ・ブラーフmana X・6・3においては、心臓の内部に存在するアートマンに対応するのは身体内の黄金のブルシャである。いずれにせよ、アートマンが微細なもの、すなわちブルシャと考えられていたことは疑いない。問題は *anyas* が極大を意味するか否かという点である。 *anyas* という語は *prāsāya* または *vidha* に対する比較級の代用であり、『よりすぐれた』あるいは『より古い』という意味を保持し、リグ・ヴェーダの時代においてもこの二つの意味が主要なものであつたと思われる。リグ・ヴ

エーダ、I・124・8において *svāstre jyāgyasvai* という語句が見られるが、これは妹に対して姉を意味する、すなわち *jyāyas* は『より古』という意味である。また、リグ・ヴェーダ、X・50・5に *dāu nū kām jyāyān vajīdvanaso* という語句があるが、この場合には祭祀を熱望するものはすぐれたもの・卓越したものと解釈されるべきである。リグ・ヴェーダにおいては、その哲学思想と同じく言語の意味も流動的であるが、バガヴァッド・ギーターにおいてはこの *jyāyas* の語義は確定する。ギーター、III・8において *karma jyāyo hy akarmaṇah* とあるが、この *jyāyas* は非活動・非行為に対して活動・行為がすぐれていることを意味することは明らかである。また、マヌの法典、III・137においても亦 *jyāyāmsam anyor vidyād yasya syac chrotṛyaḥ pita* という文章がある。この場合、彼の父はこの両者のうちでヴェーダに通じたものであり、彼を人はすぐれたものと知るべきである、というのがその文意である。従つて、*jyāyas* はすぐれたものを意味する。また、プラフマ・スートラ、I・1・22に対する註釈のなかでシャンカラは *jyāyastvam hy anapeksikam paramatmany evaikasmin amataṁ* と述べているが、この *jyāyastvam* をドイツセンは *Älter-sein* テイボーは *superiority* と訳している。テイボーの訳に従えば *jyāyastvam anapeksikam* を絶対的優越性と訳することがで

きよう。いずれにせよ、*jyāyas* に物理的・自然的大きさを見出すことはできないのである。リグ・ヴェーダ以降ギーターやシャンカラに至るまで *jyāyas* は量的な大きさではなく精神的な偉大さ・価値の高さを意味するのであり、シャンディリヤの *jyāyas* も亦この思想的な流れのなかで理解されるべきであろう。

第二に極大・極小の合致がシャンディリヤの思想の中核であると言われるが、この考えには一つの欠陥がある。というのは、ここで説かれる極大はかならずしも極大ではないからである。シャンディリヤの説く三界よりも *jyāyas* なるものは心臓のなかのアートマンに他ならない。そしてそれはここでは心臓中の虚空 (*ākāśa*) を意味する。心臓中の虚空に天空地の三界が含まれているという推定は、例えば、チャンドーギヤ・ウパニシャッド、VIII・1・3に照らしあわせてみても明らかである。この箇所の記述に従えば、心臓のなかの虚空には天地、火風、日月、電光や星等が含まれている。更にまた、同じウパニシャッドの他の箇所 (I・9・1) において虚空は万物の生起しかつ帰滅する究極の目標として考察されている。その際 *ākāśo hy evaibhyo jyāyān / ākāśah paryanāṁ* と言われるが、*ākāśa* は万物を生起せしめるものであり、かつ生起者として生起せしめられるものよりも以前に存在し (『より古く』、またよりすぐれていると解釈で

きよう。シャーンディリヤの心臓中のアートマンが天空地の三界よりも *jyayas* であるという表現は、このアートマンが虚空を暗示するように私には思われる。この虚空は一切をみずからのうちに含むが、現実の問題として極大の世界が心臓中のアートマン(＝虚空)に横たわることあり得ないから、世界は *potential* なもの、未開展なものとして虚空に含まれていると解すべきであろう。かかる性質の虚空は極めて微細なものであり、これがシャーンディリヤの考えたアートマンに他ならない。彼が *akāśman* という語を用いた理由はまさにここにある。

然し、たとえシャーンディリヤが虚空をアートマンであると考えていたとしても、彼はブルシャがアートマンであるという立場を忘れた訳ではなかった。思想的には、心臓中の虚空をアートマンとみなす立場に対して更に思索を深めこの虚空中にブルシャが宿ると想定する立場がある。万物に宿るブルシャの思想は古ウパニシャッドにおいて主流を占めた思潮である。シャタパタ・ブラーフマナの当該箇所においては、心臓中のアートマンという表現は存在せず、黄金のブルシャが基調となつてゐる。このブルシャの観念は、チャーンドーギヤ・ウパニシャッドにおいても亦 *manomaya* (心から成るもの) *prāṇasāra* (息を身体とするもの) *bhāruṇa* (光を形態とするもの) *satyasamkalpa* (その意図が真実なるもの)

という諸語のなかにいわば生き残つてゐる。シャタパタ・ブラーフマナでブルシャと名づけられたものがチャーンドーギヤ・ウパニシャッドにおいてアートマンと称せられてゐるのみで、思想上両者の間に実質的な変化は存在しない。 *Munomaya*, *prāṇasāra*, *bhāruṇa* 等の語で表わされるアートマンはブルシャ、*akāśman* という語で代表されるそれは虚空に由来する。ブルシャとしてのアートマンはすべてを行ない、すべてを欲し、一切の香を有し、一切の味を有している。これに対して、虚空は万物を内蔵するものであるから *sarvam idam abhyāta* である。すなわち、それは万有を含んでゐる。チャーンドーギヤ・ウパニシャッド、Ⅲ・12・9の記述によつても明らかのように、心臓中の虚空は空虚な空間ではなく充滿したもの・充実したもの (*pūrṇa*) であり、そのなかに一切のものが潜在的な形で含まれてゐるのである。私はシャーンディリヤの心臓中のアートマンをブルシャと虚空との折衷と解釈する。すなわち、シャーンディリヤのアートマンはすべてのものを潜在的に含む微細なものなのである。シャーンディリヤがインド思想史のなかで特に重要な地位を占める理由の一つは彼が人間を意図・意思 (*satva*) から成るものと規定したことであろう。この思想によれば、人間はこの世において意図した通りに死後なるのである。もう一つの理由は、彼が梵我一如の思想を大胆に表明したことであ

う。シャタバタ・ブラーフマナの当該箇所において冒頭でブラフマンは真実であると述べられているが、そこにおいては梵我一如の思想は未だ存在しない。チャーンドーギヤ・ウパニシャッドにおいて始めてシャーンディリヤはこの思想を宣言する。ここにおいて彼はすべてを行ない、すべてを欲し、一切の香を有し、一切の味を有し、このすべてを含む、語なくして顧慮を離れた心臓中のアートマンをブラフマンであると明言するのである。彼によれば、人は死後このアートマンに達する。然し、このブラフマンが何を意味するかは不確実である。けれども、ブラフマンを推知する手がかりが全く存在しないのではない。ブラフマン考察の手掛りとなる唯一の語句はこのウパニシャッドの当該箇所の冒頭の文 *sarvam khalu idam brahma* である。この文の解釈を通じて梵我一如思想を解明することが私の課題でなければならぬ。第三の観点とは宇宙がそのままアートマンであるという思想を再吟味、批判することである。

Sarvam khalu idam brahma という文において、ブラフマンはこの一切(宇宙)として捉えられている。然し、古代インド的発想によれば、この両者⁽¹⁾はかならずしも同一ではない。それはむしろブラフマンが全宇宙に遍在している、あるいは全宇宙の本質であることを表現しているに過ぎない。ムンダカ・ウパニシャッド、Ⅱ・2・11(12)によれば、ブラフマ

ンは前後、左右、上下にあるものとして捉えられている。このブラフマンが全世界(*idam visvam*)である。チャーンドーギヤ・ウパニシャッド、Ⅶ・25・1においてアートマンに関する教え(*amadeśa*)⁽²⁾が述べられているが、このアートマンは上下、東西南北にあるものであり、この一切(*idam sarvam*)である。アートマンがブラフマンに他ならないことをシャーンディリヤは *sarvam khalu idam brahma* という文を以つて説明しようとしたのであり、アートマンとブラフマンとの共通項は無限者(*ananta*)として表現されるもの⁽³⁾、あるいは虚空に他ならない。シャーンディリヤは、アートマンとブラフマンが本質的に等しく無限なるものであることを説こうとしたのであつた。一方においては、心臓のなかの虚空(アートマン)は無限である。他方、それはブラフマン(*=idam sarvam*)である。すなわち、アートマンも無限なるもの、ブラフマンも無限なるものである。もしもこのように理解すれば、米粒、大麦の穀粒等よりも微細でありながら同時にまた天空地の三界よりも *vyavas* であるアートマンが実は無限者を意味することは見易いことである。虚空は元来微細なものでかつ形態を有せず肉眼によつては認められない。この故にそれは米粒等よりも小である。然し、同時にまた天空地はこの虚空から生じ、生起以前は *potential* な形でその内部に含まれているから、それらは虚空よりも一層新らしくかつ価値が低いので

ある。米粒等や天空地の究極にある存在は絶対的に微細なものの、無限なるものである。Sarvaṃ khalu idaṃ brahmaとシャーンディリヤが宣言したとしても、この一言によつて彼がブラフマン即宇宙を意味したと速断してはならない。シャーンディリヤが意図したのはこの一切がブラフマンであるということではなかつた。彼はむしろブラフマンをすべての存在のなかに隠れて存在する無限なるものと考え、微細なものよりも一層微細な一者を探究しようと試みたに相違ない。シャーンディリヤは、大宇宙(ブラフマン)と小宇宙(アートマン)の合致は説かなかつた。彼はただ小宇宙(心臓中のアートマン)のみが真実であること、そのみが念想に値いすることを教えたのであつた。そして心臓のなかのアートマンは一方においては虚空と混同され、他方、その内部に宿るブルシャの性格を保持したのである。シャーンディリヤのアートマンは虚空とブルシャの二面を宥和・折衷した妥協の産物である。そしてこれをセメントで固め一つの思想へ統合しようとしたのがブラフマンの觀念に他ならない。

要するに、シャーンディリヤの思想には *coincidentia oppositorum* は見出されない。何故なら、言語的な吟味によつてもまた思想内容の検討によつても極大・極小の対立が存在しないことは明白であるから。シャーンディリヤは微細な

もののみを念想の対象に選び、これをただちに絶対者と考えたのであつた。

インド哲学の領域で *coincidentia oppositorum* が可能となるためにはインドの有神論の成立を待たねばならなかつた。絶対に宥和しない対立を止揚するためにはその対立を越えた神の存在が必要である。インド的な意味での *coincidentia oppositorum* は、当然のことながら有神論的な色彩の濃い文献、例えば、イーシャー・ウパニシャッドのなかに見出される。このウパニシャッドによれば、一者は動くと同時に動かず、遠くにありながら然も近くにあるのであり、それはこの一切の内部にあると同時にその外にある。カタ・ウパニシャッド、II・21においては、坐りながら遠くへ出掛けることと横たわりながらすべての場所へ行くことの二つの対立がアートマンにおいて宥和される。然し、このアートマンは創造者の恩寵(*ananda*)によつてのみ得られる故、このアートマンも亦人格神の一面を有するものと考えてよいであらう。このように、*coincidentia oppositorum* が可能となるためには絶対的な対立、矛盾が何かあるもの(神)において意識的に統一・解消されねばならない。然るに、シャーンディリヤの教えはアートマンがブラフマンであることに言及するのみでそのなかには神觀念は全く存在しない。そして、彼の説く絶

対象とは、要するに、微細なものに過ぎない。シャーンディリヤによれば、全宇宙において真に存在するのはアートマン(= *anīyas*)のみである。そして、この *anīyas* なるものがブラフマンに他ならない。これこそ価値の価値、真実の真実である。それが *jyāyas* なるものである——このシャーンディリヤは確信して疑わなかつた。私はこのようにシャーンディリヤのアートマンを解釈するのである。

1 バーニニ文法、M・3・61—62に対する註釈書 *Kaṣikā-vṛtti* によれば、*jya* は *praśasya* など *vidha* という語の *ādeśa* (代用)。61に対する *Vṛtti* には *praśasyaśabdasya jya ity ayam ādeśo bhavati*, 62に対する *vidhaśabdasya jya ity ca jya ity ayam ādeśo bhavati* がある。

2 なお、リグ・ヴェーダ、I・27・11、III・38・5、V・44・8、M・26・7、M・30・4、M・20・7、M・32・24、M・86・6、K・48・5等参照。リグ・ヴェーダにおいては、*jyāyas* は、基本的には、より古い、よりすぐれた、卓越した、偉大な等を意味するものと思われる。

3 リン・ヴェーダ X、90・3に *etāvān asya mahimā, āto jyāyām ca pūruṣaḥ* があるが、この際、*puruṣa* はより古くものでもある。ブルシャが *purātana* であるというところについてはカイヴァリヤ・ウパニシャッド、20、マハーナラーヤナ・ウパニシャッド、I・5等参照。

4 *brahmaivedam amṛtaṁ puratād brahma paścād brahma*

シャーンディリヤのアートマン観(湯田)

dakṣiṇatāś cottareṇa / adhaś corḍhvaṁ ca prasṛtaṁ brahmaivedaṁ viśvāṁ idam varīṣṭham など、*pratyakṣānyāni*・ウパニシャッド、M・18参照。

5 *ahatā ātmādeśa eva / ātmavādhastād ātmopariṣṭād ātmā paścād ātmā puratād ātmā dakṣiṇa ātmottara ātmāivedaṁ sarvaṁ iti*……

6 マイトラーヤニ・ウパニシャッド、M・18(4)によれば、宇宙(*idam*)としてのブラフマンは東西南北、上下、すべての方向に対して無限である。そして、この無限なるものとは虚空のことである。シャーンディリヤの *ākāśātman* という語は我々にアートマンが虚空であることを明示する。無限なるものと虚空とは同一の概念に属すると考えてよいであろう。

7 イーシャー・ウパニシャッド、6—*tad ejaṁ tan naijati tad dūre tad v anike / tad antarasya sarvasya tad sarvasyāsya bahyataḥ* など、キーター、XIII・15参照。

8 ウッターラカの有名な言葉 *tat tvam asi* は梵我一如思想を代表する格言として有名であるが、彼が説いているのは微細なもののみが真実であるということに過ぎない。ブラフマンは言及されていない。ウッターラカにせよ、シャーンディリヤにせよ、大宇宙と小宇宙とを対立させようという意図は全然有していないのである。ウッターラカに関しては、拙論『ウッターラカ哲学の究極にあるもの』(印度学仏教学研究第十八巻第一号(一五一一—五三ページ)、昭和四十四年十二月参照)。